

日蓮大聖人御書全集

おおたきえもんのじょうごへんじ

太田左衛門尉御返事

新版

1371

フ

1375

おおたさえもんのじょうごへんじ

太田左衛門尉御返事

こうあんがんねん

がつ

にち

さい

おおたじょうみよう

弘安元年(78)

4月23日

57歳

大田乗明

とうげつじゅうはちにち

ごじょう

おな

にじゅうさん nich

うちのこく

とう

当月十八日の御状、同じき二十三日の午刻ばかりに到

らい

来す。やがて拝見仕り候い畢わんぬ。御状のごとく、

はいけんつかまつ

そうちら

お

ごじょう

御状のござり候い畢わんぬ。御状のごとく、

おんふせ

ちようもくじっかんもん

たち

おうぎいっぽん

しようこうにじゅうりよう

た

御布施、鳥目十貫文・太刀・五明一本・焼香二十両、給び

そうろう
候。

もっぱ

ごじょう

い

それがし

ことし

ごじゅうしち

まか

そもそも、専ら御状に云わく「某、今年は五十七に罷

な

そうら

だいやく

とし

おぼ

そうろう

り成り候えば、大厄の年かと覚え候。なにやらんして

しょうがつ

げじゅん

ころ

うげつ

ころ

いた

そうろう

しんしん

正月の下旬の比より卯月のこの比に至り候まで、身心に

苦勞多く出来候。本より、人身を受くる者は必ず身心に
しょびょうそうぞく ごたい くろう もう ことさり
諸病相続して五体に苦勞あるべしと申しながら、更に
うんぬん 云々。

このこと最第一の歎きのことなり。十一因縁と申す法門
さいだいいち なげ
あり。意は、我らが身は諸苦をもつて体となす。されば、
こころ われ み しようと
先世に業を造る故に諸苦を受け、先世の集まれる煩惱が
せんぜ ごう つく ゆえ しょく う せんぜ あつ
しょく まね あつ そうちう かこ にいん げんざい ごか げんざい さんいん
諸苦を招き集め候。過去の一因、現在の五果、現在の三因、
みらい りょうか さんぜしだい いつさい くか かん
未来の両果とて、三世次第して一切の苦果を感じるなり。
ざいせ にじよう
在世の二乗が、これらの諸苦を失わんとて、空理に沈み
しょく うしな
くうり しず

けしんめつち

ぼさつ

ごんぎょうしようじん

こころざし

わす

くうり

灰身滅智して、菩薩の勤行精進の志を忘れ、空理を

しようと

しんごく

おも

ほとけ

ほうどう

とき

証得せんことを真極と思うなり。仏、方等の時、これら

しんじ

だんか

たま

もの

しょう

さんがい

う

の心地を彈呵し給いしなり。しかるに、生をこの三界に受けたる者、苦を離るる者あらんや。羅漢の應供すら、なお

もの

く

はな

もの

らかん

おうぐ

う

かくのごとし。いわんや底下的凡夫をや。さてこそ、いそぎ生死を離るべしと勧め申し候え。これら体の法門はさて

ていげ

ぼんふ

お
置きぬ。

ごへん

ことし

だいやく

うんぬん

むかし

ふつき

ぎょう

こうが

う

御辺は「今年は大厄」と云々。昔、伏羲の御宇に、黄河と

もう

かわ

かめ

もう

はつけ

もう

もん

こう

お

申す河より亀と申す魚、八卦と申す文を甲に負つて浮かび

い
とき　ひと
もん　と　あ
み
ひと　しょうねん
出でたり。時の人、この文を取り挙げて見れば、人の生年
より老年の終わりまで厄の様を明かしたり。厄年の人の危
うきことは、少なき水に住む魚を鷗・鵠などが伺い、
燈の辺りに住める夏の虫の火の中に入らんとするがごと
くあやうし。鬼神ややもすれば、この人の神を伺いなや
まさんとす。神内と申す時は、諸の神、身に在つて、万事
心に叶う。神外と申す時は、諸の神、識の家を出でて万事
を見聞するなり。当年は、御辺は神外と申して、諸の神
他国へ遊行すれば、慎んで除災得楽を祈り給うべし。また

もくしょう

ひと

たま

ことし

おおやく

はるなつ

木性の人にてわたらせ給えば、今年は大厄なりとも、春夏のほどは何事かわたらせ給うべき。至門性經に云わく「木は金に遇つて抑揚し、火は水を得て光滅し、土は木に值つて時に瘦せ、金は火に入つて消え失せ、水は土に遇つて行かず」等云々。指して引き申すべき經文にはあらざれども、予が法門は、四悉檀を心に懸けて申すならば、あながちに成仏の理に違わざれば、しばらく世間普通の義を用いるべきか。

しかるに、法華經と申す御經は、身心の諸病の良薬なり。

されば、經に云わく「この經は則ちこれ閻浮提の人の病
の良藥なり。もし人病有らんに、この經を聞くことを得ば、
病は即ち消滅して、不老不死ならん」等云々。また云わ
く「現世安穩にして、後に善処に生ず」等云々。また云わ
く「諸余の怨敵は、みな摧滅す」等云々。取り分け 奉る御守
りの方便品・寿量品、同じくは一部書いて進らせたく候え
ども、当時は去り難き隙ども入ること候えば、略して一品
奉り候。相構えて相構えて、御身を離さず、重ねつつみ
て御所持あるべきものなり。

この方便品と申すは、迹門の肝心なり。この品には、仏
十如実相の法門を説いて十界の衆生の成仏を明かし給
えば、舍利弗等はこれを聞いて無明の惑を断じ、真因の位
に叶うのみならず、未來華光如來と成つて成仏の覺月を離
垢世界の暁の空に詠ぜり。十界の衆生の成仏の始めは
これなり。當時の念佛者・真言師の人々、成仏は我が依經
に限れりと深く執するは、これらの法門を習学せずして、
「いまだ真実を顯さず」の經に説くところの名字ばかり
なる授記を執する故なり。

きへん

ひごろ

ほうもん

まよ
たま

にちれん

ほうもん

き

けんじや

ほんしゅう

ひるがえ

たま

貴辺は、日來はこれらの法門に迷い給いしかども、日蓮が

法門を聞いて、賢者なれば本執をたちまちに翻し給いて、
法華經を持ち給うのみならず、結句は身命よりもこの經

を大事と思しめすこと、不思議が中の不思議なり。これは

ひとえに今のことにある。過去の宿縁開発せるにこそ、

かくは思しめすらめ。有り難し、有り難し。

次に寿量品と申すは、本門の肝心なり。またこの品は、

一部の肝心、一代聖教の肝心のみならず、三世の諸仏の
説法の儀式の大要なり。教主釈尊、寿量品の一念三千の

法門を証得し給うことは、三世の諸仏と内証等しきが故なり。ただし、この法門は、釈尊一仏の己証のみにあらず、諸仏もまたしかなり。我ら衆生の無始已來六道生死の浪に沈没せしが、今、教主釈尊の所説の法華經に值い奉ることは、乃往過去にこの寿量品の久遠実成の一念三千を聽聞せし故なり。有り難き法門なり。

華嚴・真言の元祖、法藏・澄觀、善無畏・金剛智・不空等が、釈尊一代聖教の肝心なる寿量品の一念三千の法門を盗み取つて、本より自らの依経に説かざる華嚴經・

大日經に一念三千有りと云つて取り入るる程の盜人には
かされて、末学深くこの見を執す。はかなし、はかなし。
結句は、真言の人師云わく「争つて醍醐を盜んで各自宗
に名づく」云々。また云わく「法華經の二乘作仏・久遠実成
は無明の辺域、大日經に説くところの法門は明の分位な
り」等云々。華嚴の人師云わく「法華經に説くところの一念
三千の法門は枝葉、華嚴經の法門は根本の一念三千なり」
云々。これ、跡形も無き僻見なり。真言・華嚴經に一念三千
を説きたらばこそ、一念三千という名目をばつかわめ。お

かし、おかし。亀毛・兎角の法門なり。

きもうとかくほうもん

まさ

くおんじつじょう

いちねんさんぜん

ほんもん

ぜんしみ

正しく久遠実成の一念三千の法門は、前四味ならびに

ほけきょうう

しゃくもんじゅうしほん

ひ

たま

ほんもん

法華経の迹門十四品まで秘せさせ給いてありしが、本門・

しようしゅう

いた

じゅりようほん

あらわ

たま

正宗に至つて、寿量品に説き顕し給えり。この一念三千

ほうしゅ

みようほうごじ

こんごうふえ

ふくろ

い

まつだいびんぐ

の宝珠をば、妙法五字の金剛不壞の袋に入れて、末代貧窮

われ

しゅじょう

のこ

お

たま

しょうほう

ぞうほう

の我ら衆生のために残し置かせ給いしなり。正法・像法に

い

たま

ろんじ

にんし

なか

だいじ

し

出でさせ給いし論師・人師の中に、この大事を知らず。た

りゆうじゅ

てんじん

こころ

そこ

たま

いろ

い

だ竜樹・天親こそ心の底に知らせ給いしかども、色にも出

たま

てんだいだいし

げん

もん

しかん

ひ

ださせ給わす。天台大師は玄・文・止觀に秘せんと思しめ

おぼ

まつだい

しかんじっしょう

だいしちしょうがん

しょう

ししかども、末代のためにや、止觀十章・第七正觀の章

いた

か

うすは

しゃく

もう

に至つてほぼ書かせ給いたりしかども、薄葉に釂を設けて

や

たま

りかん

いちぶん

しめ

じ

さんぜん

さて止み給いぬ。ただ理觀の一分を示して、事の三千をば

しんしゃく

たも

か

てんだいだいし

しゃつけ

しゅ

斟酌し給う。彼の天台大師は迹化の衆なり。この日蓮は

ほんげ

いちぶん

きか

ほんもん

じ

ぶん

ひろ

本化の一分なれば、盛んに本門の事の分を弘むべし。

か

まい

そうちら

だいじ

ぎり

こ

と

たも

たも

おんきょう

を書いて進らせ候えば、いよいよ信を取らせ給うべし。

かんぽっぽん

い

まさ

た

とお

むか

まさ

ほとけ

勸發品に云わく「當に起つて遠く迎うべきこと、當に仏を

うやま

とううんぬん

あんらくぎょうほん

い

しょてん

敬うがごとくすべし」等云々。安樂行品に云わく「諸天は

ちゅうや

つね

ほう

ゆえ

えご

ないしてん

昼夜に、常に法のための故に、しかもこれを衛護す乃至天のもろもろ どうじ きゅうし とううんぬん ひゆほん い

諸の童子は、もつて給使をなさん」等云々。譬喻品に云わ

なか しゅじょう

みこ

わ こ

とううんぬん

く「その中の衆生は、ことゞ」とくこれ吾が子なり」等云々。

ほけきょう じしゃ きょうしゅしゃくそん まも

ぼんてん

やく

法華經の持者は教主釈尊の御子なれば、いかでか梵天・

たいしゃく にちがつ しゅしよう ちゅうやちようば

たま

やく

帝釈・日月・衆星も昼夜朝暮に守らせ給わざるべきや。厄

とし さいなん はら ひほう ほけきょう す

す

の年、災難を払わん秘法には、法華經に過ぎず。たのもしき

かな、たのもしきかな。

かまくら そうら とき こまごまもう うけたまわ そら

さては、鎌倉に候いし時は細々申し 承り候いしかど

いま おんごく こじゅうそらう めんえつ ご

も、今は遠国に居住候によつて、面謁を期すること、さ

しんちゅう ふく

ししゃ

ぎょくしょう

らになし。されば、心中に含みたることも、使者・玉章

もう

およ

なげ

なげ

にあらざれば、申すに及ばず。歎かし、歎かし。

とうねん

だいやく

にちれん

まか

たま

しゃか

たほう

じつぽうふんじん

當年の大厄をば、日蓮に任せ給え。釈迦・多宝・十方分身

しょぶつ

ほけきよう

おんやくそく

じつ

ふじつ

はか

の諸仏の法華經の御約束の実・不実は、これにて量るべきなり。またまた申すべく候。

にちれん

かおう

日蓮

花押

こうあんがんねんつちのえとらしがつにじゅうさんにち

弘安元年 戊寅四月二十三日

おおたさえもんのじょうどのごへんじ
太田左衛門尉殿御返事